

英文の読み方を考える

— 結束構造を意識した読み —

平井 正朗

1. 理想と現実

読解指導において、英文を書いてあるとおりに左から右に読み進め、瞬時に内容を把握する「直読直解」を可能にすることは、我々英語教師にとって最大の目標である。しかし、現状を鑑みると、生徒の語彙・語法サイズ、文の構造理解、背景知識の習熟度はかなり“変貌”を遂げており、今後はよりquality assuranceを確立した学習ストラテジーを再考しなければならないのではなかろうか。

2. 大学入試との関係

「受験英語」の必須アイテムである長文読解のジャンルは、評論、エッセイ、物語など多岐にわたり、トピックも文化、日常生活、社会、産業、自然科学などバラエティーに富んでいる。その中でも、抽象的で複雑な文構造をもつ評論対策として、パラグラフ・リーディングを通した内容理解こそが合否のキャスティングボートになることは、“受験生”ならだれでも知っている。しかし、実際の“受験生”を観察していると、問題集や過去問を解いて答え合わせすることだけが「傾向と対策」だと錯覚し、「読む」という行為を実りあるものにしていない生徒が少ないように思われる。

3. 結束性の把握

one paragraph = one ideaを読み取り、筆者が何を言いたいのか吟味するためには、まずパラグラフ内の結束性(cohesion)を明確にすることが先決である。結束性とは意味的・文法的「つながり」のことであり、談話(discourse)の整合性を高める効果がある。その意味で、語・句・節・文などの結束性を把握するスキルが向上すれば、パラグラフ・リーディングに応用できるだけでなく、大学入試における〈内容説明〉や〈内容真偽〉にも対応させることが可能になる。Johnson and Johnson(1998)は、結束

性について次のように言及している。

“the linguistic marking of the links between a sequence of grammatically distinct sentences that make these sentences hang together, giving a text its *texture*”

結束性は、指示・代用・省略・接続・語彙的なものに分類されるが、生徒の反応を見ていると、discourse markerなども利用し、キーワードの「つながり」をおさえた後、contextの論理接続をア。同義関係、イ。対立関係、ウ。因果関係に分類して明示すると“よくわかる”ようである。

論理接続関係	指導上のポイント
ア. 同義関係(A = B)	同意表現による換言・反復・例証・補足・要約・追加など
イ. 対立関係(A ≠ B)	逆接的表現による対立・対比・対照・譲歩・反証など
ウ. 因果関係(A → B)	原因と結果、根拠(動機・証拠)と結論など

4. 指導事例

① When people behave in ways we find strange or offensive, we often attribute this to their cultural background. ② We are inclined to speak of culture as though the word had a clear and unambiguous meaning. ③ In fact, however, as soon as we try to define it, the concept of culture proves to be an extremely slippery one. ④ We should therefore be very cautious about attributing anybody's behavior to his or her culture.

(①人が奇妙、あるいは不快に思える方法でふるまうと、これをその人の文化的背景のせいにすることが多い。②我々は文化ということばの意味を、明解であいまいなところがないかのように考える傾向がある。③しかし、実際、文化を定義しようとするや否

や、文化という概念は極めてつかみどころがないものだということがわかる。④したがって、我々は、だれかのふるまいをその人の文化のせいにする（ことに）について、非常に慎重にならなければならない。）

この英文は大学入試問題（大阪大，2004年後期，②～④の下線部訳）から抜粋したものである。①では、thisがpeople behave in ways we find strange or offensiveを指示し、attribute A to Bの語法からA (this) = 根拠，B (their cultural background) = 結論の因果関係が読み取れる。また、Bが②のcultureと連鎖し、同義関係を生成していることから、キーワードであると判断できる。②のspeak of A as though Bでは、BがAの比喩表

[板書例]

① people behave in ways we find strange or offensive (人が奇妙，あるいは不快に思える方法でふるまう) = this (これ) [同義] → their cultural background (その人の文化的背景) [因果]
② culture (文化) 【キーワード／①と同義関係 ⇒ ①=②】 = a clear and unambiguous meaning (明解で，あいまいなところがない意味) [同義] 【⊕イメージ】
③ it (それ) 【②と対立関係 ⇒ ②≠③】 = the concept of culture (文化という概念) [同義] = an extremely slippery one (極めてつかみどころがないもの) [同義] 【⊖イメージ】
④ be very cautious about ~ (～に非常に慎重に) 【③と因果関係 ⇒ ③→④】 → attributing anybody's behavior to his or her culture (その人の文化のせいにする) [因果]

5. 「結束性」把握のために

結束性把握へのアプローチとして、センター試験第3問(92年以降)による速読演習が効果的である。最近では、第3問のAは空所補充，Bは文整序，Cは文埋め込みという形式になっており，言語材料としては有益と考えられる。筆者の場合，生徒の到達度を考慮し，以下のような指導展開を試みている。

投げ込み時期	内容	指導方法
高2夏 (7～8月) 受験対策講座	第3問A (本・追試)	7月は精読と実践解法提示，8月は5分間の速読演習
高2冬 (11～12月) 授業中の5分間	第3問B (本・追試)	11月は精読と実践解法提示，12月は5分間の速読演習
高2春 (2～3月) 受験対策講座	第3問C (本・追試 + 類題)	2月は精読と実践解法提示，3月は類題にまで拡張

現であるからA≡Bを予測し，culture = the word = a clear and unambiguous meaningの結束性から⊕イメージを導くことができる。③では，culture = it = the concept = an extremely slippery oneを見抜き，対立関係を示すhoweverから⊖イメージを予測，slipperyが未知語でもnot clear, ambiguousと同義だと類推できるはずである。④では，thereforeから③=根拠，④=結論の因果関係を把握し，「文化の概念が明確でない以上，行動の差異を文化間差異だと決めつけられない」というプロットがイメージできれば読解が完了したことになる。読みながら頭の中で描いてほしい結束性のイメージマップを次ページに，板書例を以下に示す。

6. まとめに代えて

結束性を把握しながら英文読解を試みると生徒は最初，“いやがったり”“面倒くさがったり”する。しかし，時間をかけて粘り強く指導していけば論理的思考力向上に資するだけでなく，「直聴直解」にも相乗効果を付与するということを付言しておきたい。

参考文献

- Johnson, Keith and Helen Johnson. (eds.) (1998) Encyclopedic Dictionary of Applied Linguistics: A Handbook for Language Teaching. Blackwell. (岡秀夫 監訳 (1999) 『外国語教育学大辞典』大修館書店)
- 平井正朗 (2005) 『特進レベル 二文対比の英文法スキル 90』(東京：英潮社)

(京都文教中・高等学校教諭)

[イメージマップ]

